

琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 洋志, Endoh, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41026

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

運動・スポーツ科学演習（インドア・スポーツ）担当 遠藤洋志（教育学部）

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーとは無縁な教員が・・・

筆者は 10 年程前に本学に着任して以来、恐らく 30 クラス以上の健康運動系科目を担当してきた。以前は 45 分で受講者を入れ替えて同じ講義をする 1 単位講義も担当し、毎時間慌ただしい思いをしたことが、今となれば非常に懐かしく思い出される。

実技では、長年バドミントンと卓球のクラスを担当してきた。どちらの種目も筆者の専門種目ではないが、以前より腕前には自信があったため、近年まで専門の部活生以外との対戦で負けることはほとんどなく（46 歳の現在はよく負けてしまうが・・・）、何とか担当教員としての面目を保ってきたと思っている。授業の中身についても、当時から非常に充実した授業が展開できていると自己評価しており、学生の授業アンケートでもまずまずの評価を受けていた。しかし、筆者はこれまでプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーとはまったく無縁であった。それゆえ、今までの授業の中では何が悪いのか、今後の授業ではどこを改善すればいいのか、といった具体策については、正直言って解決できないまま過ごしていた。まさに、長いことプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーとは無縁な教員であったのである。ところが、突然、筆者が平成 25 年度のプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの榮譽を授かることとなった。当事者として非常に驚きを隠せないが、なぜ自分が受賞し得たのかということ、インドア・スポーツを開設した経緯から振り返ってみたい。

インドア・スポーツの新設

平成 25 年度から運動・スポーツ科学演習の中に新たにインドア・スポーツを開設した。この新設の理由はいくつかあるが、第一には今日の社会情勢からして今後も常勤・非常勤の別なく当該科目担当教員数の削減が避けられないと予想されることがあり、実技科目の将来像のひとつとして大講義室での講義並みの大規模クラス（定員 100 人）が求められたことである。本学の学生規模での必要単位数からすれば、100 人定員のクラスが（講義と実技あわせて）毎年度最低 16 クラス、余裕をみても 20 クラスあれば十分ということになる。このクラス数であれば現状とは比較にならない程に大学経営上の利点が大きいだけでなく、常勤教員の持ちコマ数軽減も可能となる。このことは、従来からわれわれ健康運動系科目担当教員も認識していたものの、安全管理上の問題と教育の質の維持といった観点（この他、学生の履修上の選択肢が狭まる）から講義以外の大規模クラスはタブー視されてきた。筆者自身も例に漏れず長年そう思っていたのだが、長らくバドミントンと卓球のクラスを担当するうちに、種目特性や工夫によっては実技クラスの大規模化も可能ではないかと考えるようになった。

インドア・スポーツの定員

運動中のリスクの大部分は運動強度にある。器械体操や水泳など監視が重視される競技や、激しいコンタクト競技（格闘技や接触が激しい球技）でない限り、運動強度さえ安全域に保たれば、授業レベルの反復練習やゲームで行われる運動が受講者に健康被害を与えることは考えにくい。このことはスポーツ医学分野の研究で十分に証明されている。とりわけ、筆者が長年担当しているバドミントンと卓球であれば、対戦相手やゲーム設定を工夫することで運動強度を十分にコントロールできるはずである。そこで筆者は、バドミントンと卓球のクラスで、定員から何名まで履修者を追加することが可能かを試算し、さらに実際に定員オーバークラスを設けパイロット的に試行運営してみた。ネット系競技ではダブルス対戦で4名が運動者となるが、審判ポジションを設ければ実質1コート（台）に6名が張り付く。バドミントンならば第一体育館は9コート、第二体育館は6コートなので、それぞれ54名と36名が各コート（台）に入りゲームに関与する。本来であれば、この人数が定員となるが、毎時間数%の欠席者が存在する。欠席者は個人的理由だけでなく専門課程で設定されている実習や、高学年履修者では就職活動などもあり近年増加傾向にある。仮に毎回10%の欠席者が見込まれるのであれば、コート（台）使用の効率化の観点からすれば予め定員を10%増にすべきである。この様な考えで、筆者は本学のバドミントンクラスの限界定員は第一体育館と第二体育館でそれぞれ約60名と約40名と考えた。他方、卓球は共通教育カリキュラム改革にあわせて改善経費が措置され、卓球台数を増やすことができ、最大で18台設置可能となった（現在12台程まで正常な台が少なくなっている）。バドミントンクラスと同様に考えると、卓球台が18台で約120名、12台でも80名の定員が確保できる。卓球であれば授業レベルでは運動由来の事故のリスクが少ないため、1クラスの定員を増やすだけなら、卓球が1番楽な種目である。

これらの数値と施設的な現状を鑑み、インドア・スポーツは第一体育館を使用し、バドミントンと卓球の複合クラスとして大規模クラス化することにした。バドミントンは9面中6面だけを使用し、3面分は卓球台を12台設置する。すると両種目を合わせ第一体育館に18コート（台）が設置され、限界定員は18コート（台）×6名で108名、その10%増で約120名となる。定員は70名としてスタートさせたが、実質的には追加履修者を108名まで認めた。案の定、毎回10%程度の欠席者があったため実際には100名弱の履修者がバドミントンか卓球のゲームを行うことになり、余裕のゲーム運営が可能であった。

インドア・スポーツの工夫点

実技科目において、1名の担当教員が100名もの履修者の安全管理が可能かという疑問は、体育教員なら誰しも抱くことである。そこで、まずインドア・スポーツにはティーチング・アシスタント（TA）を配置してもらった。TAはできる限り保健体育（1種）の教員免許を持った大学院生とした。幸運なことに筆者のゼミでは継続的に大学院生が所属していたためTA適任者

の選定には苦勞することがなく、TA と阿吽の呼吸で大規模クラスの安全管理にあたることができた。

次に、ゲーム運営についてである。ゲーム中は夢中になり運動強度が予想以上に高まることが予想される。そこで、いつも対戦相手が同程度の技術を持つ者となるように、ゲームは勝抜き戦方式とした。すなわち、ゲームに勝てば一つ上位コート（台）で技術水準が若干高い相手と対戦し、負ければ同様に一つ下位コート（台）で技術水準が若干低い相手と対戦する（いずれにしても同程度の技術水準に変わりがないが）。何回か授業が進行して、自らの技術水準が高まれば、またその際も同程度の技術水準の対戦相手とゲームをすることになり、常に無理のないゲームをすることができる。

この勝抜き戦で一つ問題視される点は、技術水準が優れている者同士の対戦である。いわば、部活レベルや大会レベルに近い水準のゲームともなれば、自ら運動強度的に無理をしてしまうこともあるだろう。そこで、安全管理の観点から、原則として最上位のバドミントンコート付近を常時一人の指導者（教員又は TA）が監視し、もう一方がその他のコート（台）の安全管理にあたった。また、本科目ではバドミントンも卓球も 1 ゲームを 5 点先取と、通常では勝ち負けを決めるには相応しくないとされる超短縮ゲームとした。勿論、サーブ権などなくラリーポイント制でデュースもない。よって、1 ゲームは数分で終了する。先述したように運動に由来する危険の最大要因は運動強度であるが、運動の継続時間もリスクとなる。しかし、ゲームが数分で終了とする運動であれば、仮に多少運動強度が高まってもリスク全体は大幅に軽減できる。

おわりに

インドア・スポーツで取り入れている勝抜き戦のメリットは、自らの技術向上を確認する有効な手段として機能する点である。自分がゲームするコート（台）が上位になればなるほど達成感を得ることができ、またより上位のコート（台）を目標として学習意欲が高められる。学習者にとって、毎時間の達成度がわかりやすく、身近な目標も常にそばにいる。筆者は、このようなシステムが授業評価を高めたのではないかと考えている。

インドア・スポーツの勝抜き戦において技術水準が極めて高い受講者に対しては、時に相応の技術水準を有した担当教員や TA が対戦相手となり、受講者のモチベーションが低下しないように配慮することも必要である。指導サイドも不断の努力が求められ、中年以降の体育教員にとっては辛いところである。